

学生の英語文法力の変化

上垣宗明*

A Research on the Change of Students' English Grammatical Abilities

Muneaki UEGAKI*

Keywords : English Grammatical Ability

1. はじめに

2018年4月に神戸市立工業高等専門学校(以降,神戸高専)に入学した1年生3クラスを対象に,英語の文法力や文法用語の周知度について2018年に調査を行った。その結果,文法用語を多く周知できている学生の方がそうでない学生よりも文法テストの結果がよいことが分かった⁽¹⁾。本調査は,学生の英語文法力を更に詳細に調査するために,それだけに焦点を当て,2018年度の1年間の英語学習が,文法力にどのような変化をもたらすことができたのかを検証する目的で行った。また,2018年度と2019年度の文法テストの結果では,どのような違いが見られるのかも調査した。

2. 調査について

2018年4月に1学年3クラスを対象に文法テストを実施した。このテストは,中学生時代に学習した文法事項が理解できているのかを把握するために実施した。出題した文法事項に関しては,平成24年度より全面実施されていた中学校学習指導要領第2章 各教科 第9節 外国語の言語材料の文法事項⁽²⁾を参考に著者が作成した。

本調査は,2018年度と同じ学生2年3クラスを対象とした。2018年4月に受けた文法テストと同じ25問に加え,1年次に学生が利用したテキスト⁽³⁾の文法事項を参考に,1年次で学習した文法事項が理解できているのかを測定する目的で,新たに,50問作成した。合計75問の文法テストを2019年6月に実施した。解答時間は,テスト1では最短20分間,テスト2では最短50分間を確保し,両テストとも全ての学生が問題を解き終わってから回収した。

1年次と2年次の両テストを受けた学生は3クラスで100名だったので,この100名を分析対象とする。

3. 文法テストについて

2018年度にテストを作成する際に,島田の以下の記述を参考にした。2019年度も,同形式のテストを実施した。

日本人初中級英語学習者は文法性判断テストにおいて,文法的文よりも非文法的文の正答率が低い。つまり,文法的文は適格であると判断をすることができるのに,非文法的文をも容認してしまう傾向がある⁽⁴⁾。

島田の指摘から,本調査の対象は初中級英語学習者なので,非文法的な文でも,文法的とみなしてしまう傾向があることが分かる。文法的文を適格と判断するよりも,非文法的な文の原因となっている箇所を指摘し,それを正しく訂正することは難しいように思える。そして,それを指摘し,正しく訂正できれば,その文法事項を理解していると判断できる。問題作成時には,そのようなことに留意した。その上,出題形式に関しては,池上が,文法診断テスト作成に関しての取り組みについて,以下のように述べている。

多肢選択形式の場合は,選択肢そのものがヒントになっていたり,消去法などのテスト・テクニックを使って正答を選べたりする可能性があり,「正答が分からなくても正答が選べる」という大きな問題があることには留意しなければならない⁽⁵⁾。

この指摘にも従い,出題形式として一般的な多肢選択形式とは異なり,正答が分からないと正解できないと思われる下記の形式とした。

例 1) Which do you like good, tea or coffee ?

解) × good → better

例 2) Who was late for school ?

解) ○ _____ → _____

例のように,英文が記述してあり,それが文法的に適切かを判断し,不適切な場合はその語句を適切なもの書き換える形式を採用した。2018年度は1問1点の25点満点とした。文法的に適切な設問も3問含み,その場合は例2)のように,解答欄に“○”を記入するように教示した。

1年次に実施した文法テスト(テスト1)に出題した文法項目は,名詞の複数形・単数形に関するもの7問,進行形や受動態に関するもの6問,(代)名詞の格に関

* 一般科 教授

するもの4問、主語が三人称単数で現在時制の動詞に関するもの2問、動詞の時制に関するもの3問、その他は、状態動詞“know”、不定冠詞“a”と“an”、形容詞と副詞について、それぞれを1問ずつ出題した。全て、基礎的な問題である(Appendix)。

2年次に実施した文法テストは、1年次に実施した同じ問題25問(テスト2)に加え、応用問題を多く含む50問(テスト3)の合計75問を出題した。出題順については、テスト1と同じ出題順だと1年前に受けたテストの解答だけを想起する可能性が高くなると考え、同一の出題順にならないようにするために、1年次に実施した問題と問題の間に新たに作成した2問を挟み、1年次に実施した問題は3の倍数の出題順とした。

テスト3の問題のレベルはテスト1と比べるとかなり高い。出題した問題は、関係詞(代名詞・副詞)に関するもの11問、分詞(現在・過去)に関するもの7問、分詞構文に関するもの6問、to不定詞に関するもの5問、知覚・使役動詞に関するもの5問、形容詞・副詞の級に関するもの4問、仮定法過去に関するもの3問、過去完了に関するもの3問、動名詞に関するもの2問、現在完了に関するもの2問、その他は、名詞節で使われる“will”、仮主語、をそれぞれ1問ずつ出題した。

採点は、文法的に正しいと判断できるものを正解としたため、複数の正解がある問題も含まれる。例えば、テスト3で出題した“I saw Tom speaking to a foreigner.”の答えとしては、“○”と“speaking → speak”の両方の解答を正解とした。

1年次と2年次で実施したテストの結果を表1に示す。

表1 文法テストの結果

	テスト1	テスト2	テスト3
	1年次 (25問)	2年次 (25問)	2年次 (50問)
人数	100	100	100
平均	19.1	14.5	19.38
最高	24	23	43
最低	11	7	7
標準偏差	2.76	3.84	6.34

表1のテスト2“2年次(25問)”は、2年次で受けたテスト(75問)からテスト1“1年次(25問)”と共通の問題だけを抽出した結果である。テスト3“2年次(50問)”は、2年次に実施した75問のテストから、テスト1と共通の問題25問(テスト2)を除いた50問の結果である。

4. テスト1とテスト2の結果について

初めに1年次に実施した文法テスト25問(テスト1)と2年次に実施した1年次と共通の25問(テスト2)の結果を比較する。テスト1では、平均19.1点、標準偏差2.76という結果であった。テスト2の平均は14.5点、標準偏差は3.84であった。平均で4.64点、テスト2の方が低かった。標準偏差に関しては、テスト2の方が値は高く、バラツキが大きい。マン=ホイットニーのU検定の結果、1%水準の有意差が認められた(統計量(U)=1633, 統計量(z)=8.25, p<.001)。統計的な分析でも、テスト1の方がテスト2よりも有意に高い点数であった。

4.1 各問題について

テスト1とテスト2で正答率に差があった問題について差の大きい順に考察する。

a) Bill doesn't going to read the book.

(差42% テスト1正答率88% テスト2正答率46%)

この問題は、非常に基本的で、熟語として中学時代に“be going to 原型”として必ず習うものである。中学校を卒業してすぐの1年次の4月に受験したテスト1では、88%の学生が正解をしていたが、テスト2では半分以下の46%の正答率となっている。誤答として記述したものの中で一番多かったものは、文法的に正しいと判断した38名の“○”であった。その次に、“going”を“go”と訂正している学生が10名いた。テスト1では、5名であったので倍の学生がこの間違いを犯していた。間違えた学生が増えた理由としては、神戸高専1年次のテキストでは、“be going to 原型”のフレーズがほとんど記載されていないために、学生たちは忘れてしまっている可能性が考えられる。あるいは、1年次のテキストでは、“come to see”というフレーズが記載されているので、そのフレーズと混同した可能性も考えられる。

b) Jane got up early every morning.

(差39% テスト1正答率74% テスト2正答率35%)

この問題に関して、“every morning”は、現在の習慣を表す語句であるために、現在時制を用いる必要があり、“John”は三人称単数の主語なので、“got”を“gets”と訂正すべきである。しかし、“get”と解答する学生が、テスト1では20名、テスト2でも34名もいた。過去形を現在形にすることで、正解と思った学生が多かったことが想像できる。しかし、主語が三人称単数で現在時制の時は、一般動詞に“s”が必要なことは全員が理解していると思われるので、“got”を“get”に訂正するだけで正しいと思ってしまい、三人称単数現在の“s”を記述するのを忘れてしまったのだろう。

c) Johnson have to help his mother.

(差36% テスト1正答率88% テスト2正答率52%)

テスト2の誤答のほとんどが“○”であった。“Johnson”は、三人称単数の主語なので、“have”ではなく“has”

が正解となる。非常に基礎的な問題であり中学1年次に学習する内容である。b)の問題と同様にこの文法事項に関しては理解できているが、テスト2では間違いに気付いていなかったことが推測できる。

d) The student who won the contest was giving a gold medal.
(差32% テスト1正答率 51% テスト2正答率 19%)

この問題は主語と動詞の間に、関係代名詞節が挿入されており、主語と述語動詞の関係が分かりにくい問題である。その上、能動態か受動態かを判断しなければならないので、上記の3問に比べて、難しい問題と言える。テスト1でも正答率が51%と低いが、テスト2になると19%となり、8割以上の学生が正解していなかった。誤答の多くが文法的に正しいと判断していたが、テスト2において、誤答をした学生の内6名は存在しない単語“gived”と解答していた。

e) My sisters was out when I came back.

(差32% テスト1正答率 87% テスト2正答率 55%)

この問題は、“sisters”と“was”の整合性が取れていないために、“sister”に訂正するか“were”に訂正するかの問題であったが、テスト2では多くの学生の解答が“○”となっていた。この問題もかなり基本的で中学1年生で学習する内容であるが、テスト2では、ほぼ5割の学生しか正解していなかった。

f) The boys are in that room yesterday.

(差28% テスト1正答率 89% テスト2正答率 61%)

この問題は、“yesterday”があるので、“are”を“were”にするか、“yesterday”を削除すれば正解となる正答率が高い問題だが、テスト2で誤答を犯した多くの学生は、正しい英文だと判断していた。

g) Are that woman Mrs. Smith or Mrs. Obama?

(差28% テスト1正答率 71% テスト2正答率 43%)

主語と動詞の整合性に関する問題で、主語が単数なので、“Are”を“Is”に変える必要があるが、テスト2の誤答をしたほとんどの学生が“○”と解答していた。テスト1では、誤答の多くが“Which”を文頭に記述していたが、“that woman”と“Are”との関係の方が非文法であると気付いていないようであった。

h) Takeo watches TV every day.

(差26% テスト1正答率 60% テスト2正答率 34%)

主語が三人称単数で、“every day”という現在時制を現す語句があるための、“watches”にすべきところを、多くの学生が気付かずに“○”と解答していた。あるいは、動詞の語尾が“-tch”で終わるときには、三人称単数現在の“-s”が“-es”となることを忘れてしまっていたということも考えられる。

i) I am interesting in English.

(差25% テスト1正答率 90% テスト2正答率 65%)

基本的な問題で、中学時代には、“be interested in”という熟語で学習するものである。テスト1の正答率が90%なので、ほとんどの学生は周知できているが、テ

スト2では、65%の学生しか正解しておらず、誤答のほとんどが、“○”であった。中学時代には、“be interested in”というフレーズで覚えれば良かったが、神戸高専1年次の教科書で、“Studying English is interesting.”のような、形容詞としての“interesting”も学習するために、混同した可能性が考えられる。

a) ~ i) のテスト1とテスト2の正答率に20%以上の差がある問題について、結果を示した。正答率に大きな差を生じさせた原因の一つが出題数や出題順に起因していることも考えられる。1年次のテストは、25問であったが、2年次のテストは、75問出題した。テスト1と同じ問題の出題順は、テスト1の問題番号に3を掛けた数字が出題順となる。つまり、テスト1の1番目は、テスト2では3番目の出題となり、テスト1の25番目は、テスト2では最後の75番目となる。上記で示したa) ~ h)の問題では、a)はテスト1では25番目だがテスト2では75番目である。b)は、テスト1では14番目、c)は24番目、d)は23番目、g)は21番目、f)は20番目、g)は19番、h)は21番、i)は13番、と、テストの後半あるいは最後の方に出题されている。テスト1で出題した25問のテストなら学生の集中力も持続できるが、テスト2の75問は問題量が多すぎて、最後まで学生の集中力が持続せず、注意散漫となり文法的に誤っている英文でも正しいと認識してしまっていたのだろう。先述の島田の指摘どおり、非文法的文をも容認してしまう傾向が確認できた。

両テストで大きな差がある問題の内、出題順が後半ではなかった唯一の問題は、e)で、テスト1では6番目でテスト2では18番目であった。問題数も正答率に影響を与えていると考えられるが、e)のような前半に出題された基本的な問題の正答率の差から考えると、テスト2を受けた時には、中学校で学習した文法事項を忘れてしまっている学生が多いと言える。

次に、テスト1よりもテスト2の方が正答率の高かった2問について検討する。

j) Jane is knowing Tom's father.

(差-5% テスト1正答率 27% テスト2正答率 32%)

正答率が両テストとも正答率が3割近くと低い値を示している。理解するのに少し難しいと思える状態動詞の問題である。“know”は進行形にならないということを学習し、定着させた学生が全体で5%増えたことは、1年間の学習成果の内の一つと言える。

k) This is Kumi bag.

(差-1% テスト1正答率 96% テスト2正答率 97%)

1%の上昇だが、100名中3名の学生がこの間違いに気付くことができていなかった。非常に基本的な問題も正解することができない学生がいることが分かった。

出題順は、j)はテスト1では7番目でテスト2では21番目、k)はテスト1では11番目でテスト2では33番目で、両問題とも前半の出題であった。

4.2 学生の変化について

次に、テスト1とテスト2の各学生の英語文法力の変化を比較する。テスト1と比較して、テスト2で11点下がった学生は2名、10点は8名、9点は1名、8点は8名、7点は7名、6点は14名、5点は12名、4点は7名、3点は14名、2点は12名、1点は5名、変わらなかった学生は3名で、逆に上がった学生は、1点が2名、2点が4名と、6名しかテスト2の方が良かった学生はいなかった。テスト1とテスト2の散布図を図1に示す。横軸はテスト1の結果を、縦軸はテスト2の結果を表している。右下に行くほど、テスト1の方がテスト2よりも高い点数取っていることを示す。

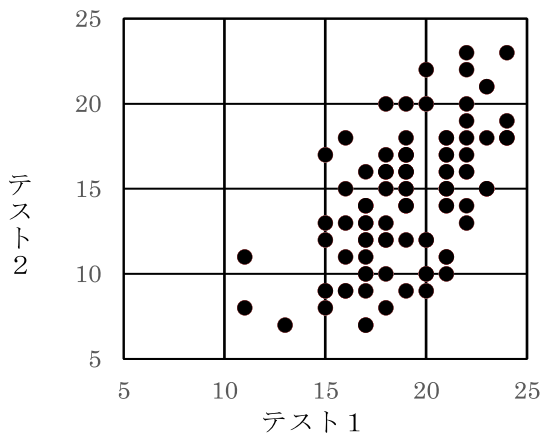


図1 テスト1とテスト2の散布図

表1より、右下に多くの学生が分布しており、テスト1の方が高い点数を取っていることが分かる。両テストの点数の差によって2つのグループに分け、それぞれの群で解答に特徴があるのかを検討する。

差の大きい群(A群)は、11点から5点の53名、差の小さい群(B群)は4点から-2点の47名とする。A群とB群の学生が同数の方が結果を分析する上では妥当だと考えられるが、両群を分ける5点差の学生が12名いたので、A群を11点から6点までとすると41名となり、B群が59名で、18名の違いが生じる。そのために、11点から5点と4点から-2点の2群とした。A群とB群のそれぞれのテストの結果を表2に示す。

表2より、A群のテスト1とテスト2では、平均で7点の差があり、B群のテスト1とテスト2では、平均で1.9点下がっている。A群とB群のテスト1の差は、0.9点A群の方が高く、最高、最低、標準偏差はほぼ同じ値であった。テスト1において両群に統計的に差があるのかをマン=ホイットニーのU検定で分析した結果、5%水準でも有意差は認められなかった(統計量(U)=1035, 統計量(z)=1.46, P値=.14, p>.05)。両群のテスト2の結果は、平均はB群の方が4.3点高く、最高点と最低点もB群の方が高かった。標準偏差に関しても、B群の値が0.12低く、全体的にB群の方が良

表2 A群とB群のテストの結果

		A群	B群
人数		53名	47名
点数の差		11~5	4~-2
テスト1	平均	19.5	18.6
	標準偏差	2.73	2.75
	最高/最低	24/13	24/11
テスト2	平均	12.5	16.7
	標準偏差	3.25	3.13
	最高/最低	19/7	23/13

い点数でまとまっていると言える。統計的に差があるかをマン=ホイットニーのU検定で分析した結果、1%水準で有意差が認められた(統計量(U)=442, 統計量(z)=5.57, p<.0001)。

A群とB群のテスト1とテスト2において、B群(両テストの差が少ない)の学生の方が、テスト2においてのみ有意に高い点数を取得していることが分かった。テスト1においては、A群とB群の平均点においては、有意差は見られなかった。

A群とB群では、テスト1とテスト2の4.1で検討した問題の正答率に違いがあるのかを検討する。表3に各群の両テストの正答率と各群のテストの差を示す。

表3 A群とB群の正答率

	テスト1		テスト2		テストの差	
	A群	B群	A群	B群	A群	B群
a)	94%	81%	32%	62%	62%	19%
b)	74%	74%	21%	51%	53%	23%
c)	87%	89%	28%	79%	59%	10%
d)	57%	45%	1%	30%	56%	15%
e)	91%	83%	38%	75%	53%	8%
f)	85%	94%	51%	72%	34%	22%
g)	79%	62%	30%	57%	49%	5%
h)	66%	53%	26%	43%	40%	10%
i)	91%	89%	66%	64%	25%	25%
j)	28%	26%	26%	38%	2%	-12%
k)	96%	96%	96%	98%	0%	-2%

表3より、テスト1では、A群とB群では、あまり差がないように見える。実際に、テスト1のA群の正答率の平均が77%、B群が72%なので、5%しか差がない。

しかし、テスト2では、A群が38%でB群は61%と、23%の差がある。また、A群のテスト1とテスト2の差の平均が39%に対してB群のそれは11%と低い値である。先述した通り、テスト2は問題数が多く、後半の問題になると集中力が持続できていない可能性があり、その傾向がA群の方に顕著に現れているのだろう。

問題e)は、出題順が後半ではないが、A群とB群の特徴を顕著に示していると言えるだろう。問題は、非常に基本的で、主語と動詞の整合性を整える問題であるが、A群の学生はその整合性が取れていないことに気付いていない。日頃から英文を読むときに、主語と動詞の関係を意識していれば、すぐに気付くことができ、正答できる問題であった。

4.3 テスト2について

テスト2の点数を点数の低い群と高い群の2つのグループに分け、分析する。テスト2において、7点から14点の47名(C群)と15点から23点の53名(D群)の2群に分けた。両群において分析対象となる学生数に違いがあるが、A群とB群を分けている15点を取った学生が10名もいたので、15点の学生をC群とすると、C群が57名、D群が43名となり、14名の差が生じる。人数の差が大きくなるようにするために、上記のような区分でグループ分けを行った。C群とD群のそれぞれのテストの結果を表4に示す。

表4 C群とD群のテストの結果

		C群	D群
人数		47名	53名
点数		7~14	15~23
テスト2	平均	11.1	17.4
	標準偏差	2.17	2.17
テスト1	平均	17.6	20.4
	標準偏差	2.5	2.27
	最高/最低	22/11	24/15
両テストの差	平均	6.5	2.9
	標準偏差	2.62	2.58
	最高/最低	11/0	8/-2
テスト3	平均	16	22.4
	標準偏差	4.2	6.43
	最高/最低	30/7	43/12

テスト2の結果によって、グループ分けをしたので、テスト2の平均点でC群よりもD群の方が6.3高くなっている。標準偏差においては、C群、D群とも同じ値を示しているため、バラツキの程度は同じと言える。

テスト2のC群とD群において、統計的に差が認められるのかをマン=ホイットニーのU検定で分析した結果、1%水準の有意差(統計量(U)=0, 統計量(z)=8.63, $p<.001$)が認められた。テスト1に関しては、平均で2.8点の差があり、標準偏差はC群の方が0.23高い値で、点数のバラツキが大きく、学生の点数に幅があることが分かる。テスト1のC群とD群において、マン=ホイットニーのU検定で分析した結果、1%水準の有意差(統計量(U)=522, 統計量(z)=5.03, $p<.001$)が認められた。C群とD群においては、テスト1、2ともに、有意にD群の方が高い点数を取っていた。

両群において特徴的な結果は、テスト1とテスト2の差である。平均で3.6点の差があり、テスト2でよい点数を取った群(D群)は、テスト1よりも平均で3.0点低い点数をテスト2で取っているが、テスト2で低い点数を取った群(C群)は、平均で6.5点もテスト1よりもテスト2の方が低い点数を取っている。C群とD群の両テストの差から、C群のテスト2の点数がかなり低かった。テスト1とテスト2は同じ問題にも関わらず、このように点数が下がっているのは、C群の学生はD群の学生よりも神戸高専1年次の英語の勉強量が少なかったことが推測される。そのことを如実に表しているのがテスト3の結果だと思われる。テスト3のC群とD群の平均の差が6.4点あった。C群は平均点が低く標準偏差も4.2と値が小さいにもかかわらず最高点と最低点の差が23点もあるが、平均点と同じような点を多くの学生が取っていることが分かる。D群の平均点はC群と比較すると高い点数である。しかし、テスト3は50点満点のテストなので、平均でも正答率が半分にも達していない。最高点と最低点の差が31点とかなり大きいので、標準偏差も6.43と高い値を示しており、学生の点数にバラツキがあることが分かる。C群とD群のテスト3の結果をマン=ホイットニーのU検定で分析した結果、1%水準の有意差(統計量(U)=462, 統計量(z)=5.43, $p<.001$)が認められた。C群よりもD群の方が統計的に見ても、有意に高い点数を取っていた。D群の方が神戸高専の1年間で学習する英語の文法をC群よりも理解し定着させていると言える。

5. 最後に

中学生時代は、高校入試に向けて英語学習に取り組んだ成果で、既習の文法事項はしっかりと理解し定着できていたことがテスト1の結果から分かった。平均で25問中19問を正解していた。正答率は、76.4%と高い値であった。しかし、その1年後に受けたテスト2では、テスト1と比べると低い値であった。正答率も58%で、20%近く下がっていた。その理由としては、神戸高専入学後の英語の勉強時間の減少が考えられる。中学3年生の時には、高校入試受験に向けて5教科、

あるいは、神戸高専の専願を希望している生徒は4教科だけの勉強で良かったのだろう。しかし、神戸高専入学後は、数学が数学Ⅰと数学Ⅱに、理科も物理や化学に、社会も歴史と地理に別れ、勉強すべき科目がかなり増えている。それに付け加え、専門科目も増え、更に、実験レポートを書くのに多くの時間を費やし、中学生時代よりも英語を勉強できる時間が少なくなっている。勉強時間が減少し、勉強不足となったために、既習の文法項目を忘れてしまった可能性が考えられる。

テスト3では、神戸高専1年間で新たに学習したことも含めて出題したが、50点満点で平均が19点と4割程度しか正解できていなかった。新出の文法事項を理解するのに多くの時間や労力を使っていると思われるが、まだまだ理解しきれておらず、もっと時間をかけて理解する必要があると思われる。現状では、新出の文法事項を理解するのに十分な時間が取れていない状況で、既習の文法事項を確認する余裕が無く、忘れてしまった可能性も考えられる。

テスト1とテスト2の結果より、神戸高専での1年間の英語学習で既習の文法事項を忘れ、間違いに気付けない項目が多くあったことが分かった。既習の文法事項を復習させることの大切さを改めて痛感した。しかし、日頃の授業で、全ての文法事項を復習することは不可能である。今回のテストのように、間違いのある英文を目にするような機会はほとんどなく、通常は文法的に正しい英文を目にしている。間違いを見つけるのではなく、理解できないところや疑問に思うところに気付き、理解できるまで考える、などのような学習方法が必要である。今後、そのような学習方法を身につけるような指導が必要であろう。

A群とB群では、テスト1は有意差が無く、テスト2は有意差が認められた。B群の学生は、神戸高専入学時(テスト1)はA群の学生とは、文法力で有意差は無かったが、1年後のテスト2で、有意に高い点を取っていた。テスト2で良い点数を取ったD群は、テスト1, 2, 3ともに、C群よりも有意に点数が良かった。注目すべきは、両群の平均点の差で、テスト1で2.8点だが、テスト2では6.3点に広がっていた。テスト3においても、6.4点の差があった。つまり、テスト2の結果から、2年次に中学生で習う文法事項を多く理解していた学生は、神戸高専での新出の文法事項もより理解していた。既出と新出の文法事項を理解できているのは、英語の勉強時間を確保し、しっかりと勉強に取り組んでいたと成果だと推測できる。

2年次で実施したテスト(テスト2, 3)は、問題数が75問と多く、最後の方の問題は、正答率がテスト1と比べてテスト2がかなり低かった。問題が多すぎて、最初から最後まで集中して問題を解けなかった可能性も考えられる。特に、その傾向は、テスト1とテスト2の点数の差が大きかったA群に顕著に現れていた。

今後、テストを作成する際に、問題数や出題順を考慮し、学生の集中力が持続でき、より正確に文法力を測れるようなテストを作成することが課題である。

参考文献

- (1) 上垣宗明:「文法用語と文法力の調査」, 神戸市立工業高等専門学校研究紀要, 第57号, pp.49-54, 2019.
- (2) 文部科学省 中学校学習指導要領第2章 各教科 第9節 外国語
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/gai.htm
- (3) 倉持三郎・川端一男他7名:「Grove English Communication I」, 文英堂, 2018.
- (4) 島田勝正:「文法性判断テストにおける問題文提示 時間制限の有無と明示的・暗示的知識」, 英文論評, 第24号, pp.41-53, 2010.
- (5) 池上直人:「英文法診断テストの作成の試みー設問形式と採点・診断方法の検討ー」, 松山大学言語文化研究, 第28巻, 第2号, pp.121-143, 2009.

Appendix

1, Was the letter writing by him?
2, Every boys likes to watch this movie.
3, Tom and Ken is good friends.
4, They are play the guitar now.
5, These cakes were made yesterday.
6, My sisters was out when I came back.
7, Jane is knowing Tom's father.
8, You bags are so big.
9, One of our opened the door.
10, Please teach he how to use this computer.
11, This is Kumi bag.
12, Tom looks happily.
13, I am interesting in English.
14, Jane got up early every morning.
15, Those is your pens.
16, He goes to school every day.
17, We eating apples now.
18, This is an big apple.
19, Are that woman Mrs. Smith or Mrs.Obama?
20, The boys are in that room yesterday.
21, Takeo watchs TV every day.
22, Each student study English very hard.
23, The student who won the contest was giving a gold medal.
24, Johnson have to help his mother.
25, Bill doesn't going to read the book.